70分ほどの芝居である。けれども詰まっている。詰め込めるだけのものを詰め込んでいる作品だ。10秒に一度、何かが起こる。それがこの作品が持つ業である。人間が何かの弾みで、ひとたび堕ち始めると、あっという間に堕ちていく。それが、10秒に1度、堕ちていく姿だ。それは、海を越えて、いずこの国の観客にも届いた。だからこの作品は、ロンドン初演に始まり、東京、ニューヨーク、またロンドン、香港、また東京、エルサレム、ソウル、シビウ(ルーマニア)、またまた東京、大阪、北九州、松本、静岡、パリ、ルクセンブルグ、レックリングハウゼン(ドイツ)そしてまたまた東京、大阪(しかも今回は全くの新キャストで)と旅をしている。これほどまでに、方々で観客に受け入れられた作品もない。そのはずである。これほど、時間とリスクをかけて創ったものはない。これほど幾度も幾度も、ロンドン-東京を行ったり来たりしながら創った作品はない。そして、これほど観客の想像力って、凄いんだ、ゴメンナサイ、みくびってました。と思わされた作品もない。だって、舞台のそこに目の前にあるのは、十本の鉛筆だ。その鉛筆を…あっ。これ以上は言えない!言うまい。劇場で初めて見るお客様のために。こなわけで、やっぱり芝居は劇場で!生で!でなければ伝わらない。これは典型的に、そんな芝居ですのだって、鉛筆が……。

野田秀樹